

発達障がいを抱える子どもをもつ母親の障がい受容プロセスと求める支援

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
対人援助学領域
発達・福祉臨床クラスター
松井 由香里

これまでの障がい受容プロセスに関する研究は幼児期の子どもをもつ母親を対象にしたものが多い。しかし、子どもの成長に伴って母親の気持ちが変化していくと考えられる。そのため、幼児期だけでなく児童期、青年期と子どもの成長に伴って変化していく親の思いに焦点をあて長期的なライフサイクルの視点に立った母親の障がい受容プロセスを明らかにすることは意義のあることであり、児童期、青年期の子どもをもつ母親の障がい受容プロセスを明らかにすることを本研究の第一の目的とする。

支援に関しても子どもの年齢によって母親が求める支援が異なると考えられる。そこで本研究の第二の目的として、発達障がいをもつ子どもの母親がどのような支援を求めているのかを検討することとした。

研究方法は半構造化面接によるインタビューである。調査協力者は LD などの発達障がいの子どもの抱える母親 9 名である。分析方法は修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ (M-GTA) を用いることとした。

第一の目的である母親の障がい受容プロセスについて、以下の 3 点が明らかになった。第一に、ほとんどの母親が、子どもが小学生のときに受容していることが明らかになった。診断を受けるのが小学校に入学してからであったことが、その要因として考えられる。第二に、子どもの障がいを疑った時にはほとんどの母親が不安を抱いていた。診断されない期間、本やインターネットなどで発達障がいについて調べている母親は多く、診断を聞いたときにはショックを受けた母親も数名いたが、ほっとした、やっぱりという思いを抱く母親が多かった。第三に、多くの母親が受け入れられたと感じても揺らぎが生じることが明らかになった。このように気持ちが行き来しているのは、段階説と慢性悲嘆説を統合したモデルがあてはまるだろう。

次に第二の目的である母親が求める支援は、親の会、学校、社会の 3 つの大きな柱を立てて分析を行った。親の会に求める支援は、今まで通りの活動を続けてほしい、親の支援をしてほしい、子ども同士がかかわれる場を増やしてほしい、就職に関する情報がほしいというものであった。学校側に対しては、子どもが学級に馴染めるような配慮や子どもの障がい特性を理解してほしいなどが挙げられた。そして社会に対しては、就職に関するものや、余暇活動、子どもだけではなく親にも先生をつけて悩みを聞いてほしいなど多岐にわたるものであった。このように母親は様々な支援を求めていることがわかる。支援を求められるということは母親が子どもの障がいのある程度受け入れていることを示唆していると考えられる。